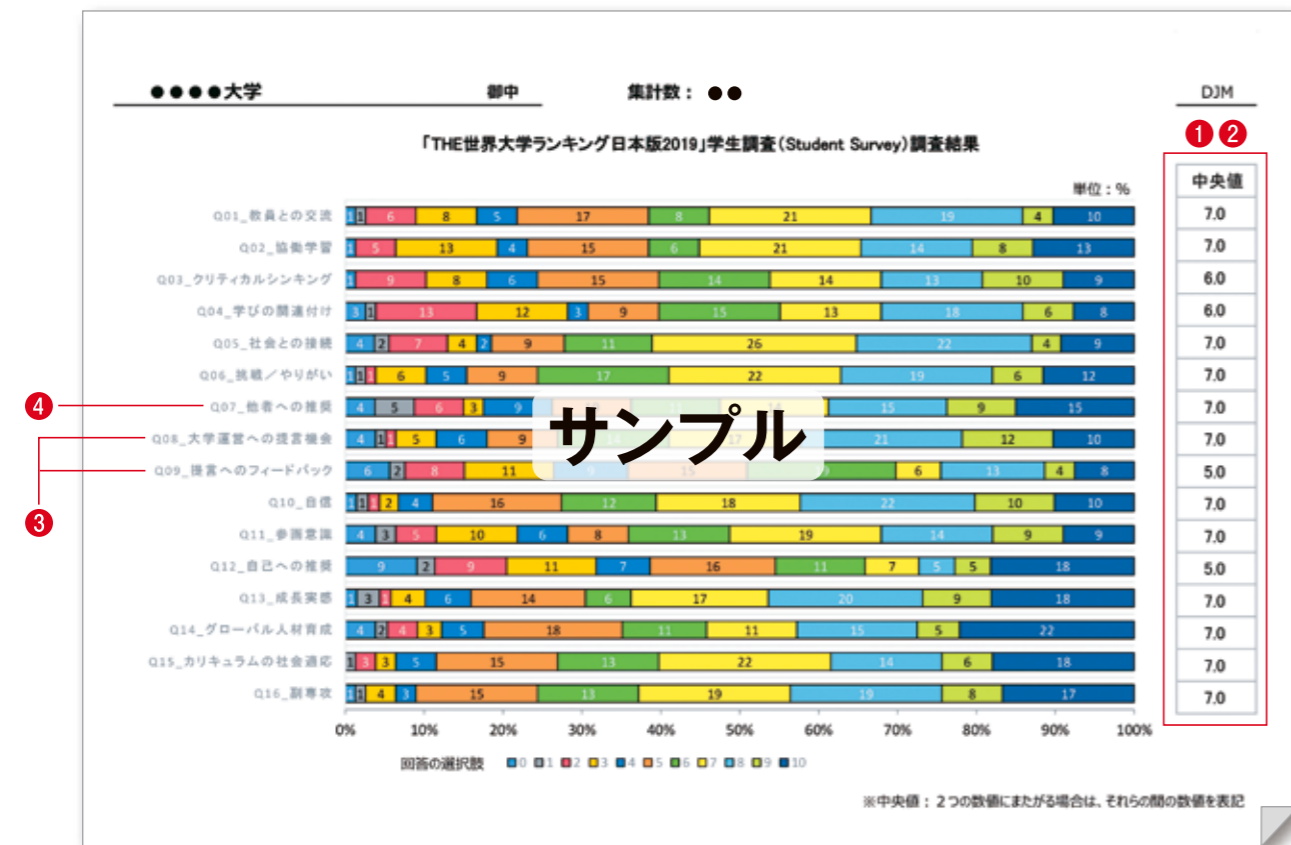


【図表2】「THE世界大学ランキング日本版2019」学生調査(Student Survey)調査結果帳票例



【図表3】調査結果を見るポイント

- ① 右端の全項目の中央値を見て、肯定度が低い項目(5以下)がないかを見る。
- ② 大学が取り組んでいる教育改革に関わる項目の中央値を見る。
低い項目があれば、その理由を考えてみる(例 認知の問題か、内容の問題か)。
- ③ 質問8、質問9の結果の差を見て、学生とのコミュニケーションに課題はないか点検する。
- ④ 質問7の結果を見て学生の「総合評価」を確認する。

また、質問8 大学運営への提言機会、質問9 提言へのフィードバックの結果は併せて見たい項目です。もし8の中央値は高いが9は低い場合、学生とのコミュニケーションが不足しているのかもしれない。このことは学生の帰属意識や教育への納得感に影響するもので、「学修者本位の教育」を推進するうえでは課題となります。

なお、今回は最低50人を有効回答者数としているため、サンプルが少ないと感じる方もいるかと思えます。実際、各大学が独自に行っている各種学生調査でも、回答率の向上に苦心しているというお話をよく伺います。しかし、忙しい大学生活の中で、学生調査に協力する学生は、教育に対する意識が高い、大切なステークホルダーと言えます。そのような学生の声は、真摯に受け止め、何らかの形でフィードバックがなされるべきでしょう。今回の学生調査結果については、「改善提案に使いたい」「自己点検の根拠として使いたい」「国内外の募集活動において教育の質を提示する材料として使いたい」という声を多くいただいています。本調査を教育改革やその可視化の参考データとしてご活用ください。

【図表1】この10年間の教育改革の歩みと学生調査の項目

年度	施策
2008	FD(ファカルティ・ディベロップメント)義務化 ○授業改革(協働学習、PBL、アクティブ・ラーニング、初年次教育)
2011	キャリア教育の充実・義務化 ○社会との接続・参画意識
2012	大学改革実行プラン公表 ○主体的に学び・考え・行動する力(課題発見・探究能力、思考力、実行力) ○教員と学生とが意思疎通を図りつつ、学生が相互に刺激を与えながら知的に成長する課題解決型の能動的学修を中心とした教育へと転換 ○グローバル化に対応した人材育成
2014	大学教育再生加速プログラム(AP) ○アクティブ・ラーニング ○汎用的能力育成 ○学外学修 ○学修成果の可視化
2017	教育の質保証、3つのポリシー(AP・CP・DP)の義務化
2018	2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申) ○学修者本位の教育への転換

*緑字は学生調査項目に関連する施策

調査結果に反映された教育改革の成果を見る

今回、日本版ランキングに反映された学生調査では、在学生から見た大学の教育改革の進捗や浸透度がわかります。【図表1】は、教育改革の歩みとそれに関連した学生調査の質問項目をまとめたものです。大学ごとの結果は、ランキングした大学や調査にご協力いただいた大学を中心に返却されています。ここでは、その結果をどう読み解くかを簡単に解説します。

質問は全部で16問あります(P.9参照)。そのうち、質問1〜7までは、本ランキングに使用8〜11まではランキングには使用しませんが、欧米との比較検証に使用しています。質問12〜16はランキングには不使用で、日本独自の項目です。学生はこれらに関する調査結果の帳票【図表2】でま

ず注目すべきは、右端の「中央値」一覧です。全中央値のうち、5以下の肯定度が低い項目はないかをチェックしてみましょう。

ちなみに、質問7他者への推奨と質問12自己への推奨は大学の取り組みについての総合評価と言える項目です。大学全体の傾向としては、質問12は中央値が低い傾向にあります。現在、入学定員の厳格化などの影響で受験生の安全志向が続いていることから、第一志望ではない大学に多くの学生が入学する状況が影響していると考えられます。それよりも質問7他者への推奨の結果を重要視すべきでしょう。

この2問以外は大学改革の取り組みについての評価です。中央値が5以下で低い場合は、大学は熱心に取り組んでいるのに学生にそれが認知されていないか、知ってはいても内容に課題があるか、どちらかがその理由として考えられます。

*大きさに順にデータを並べたときの真ん中の値

How to

学生調査と教育力の可視化 3

改革は学生にどう映っているか？

教育改革に学生調査を生かすには



(株)進研アド Between編集長
中村浩二
なかむらこうじ ● 1990年(株)福武書店(現ベネッセコーポレーション)に入社。高校事業部にて高校の教育改革支援に携わった後、(株)進研アド九州支社勤務を経て現職。